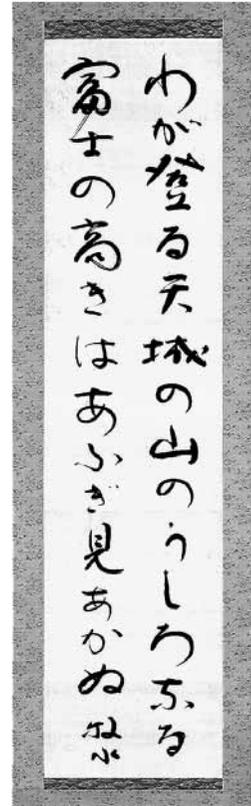


沼津市若山牧水記念館

第55号 平成27年9月1日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



わが登る天城の山のうしろなる 富士の高きはあふぎ見あかぬ 牧水

牧水は、大正十一年三月二十八日から三週間ほど伊豆湯ヶ島温泉の湯本館に滞在した。この時詠んだ「うすべに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花」など二十三首が「山ざくら」と題して第十四歌集『山櫻の歌』に載る。牧水の円熟期の代表作品としてよく知られている。「山ざくら」二十三首につづく「富士の歌」と題する七首のうち、の第一首が、詞書に「或る日天城山上なる噴火口の跡と云へる青篠の池に遊ぶ。ゆくゆく願れば富士うららかに背後に聳えたり。」とある半切の作品である。

紀行文集『みななみ紀行』に収められている「追憶と眼前の風景」に、その登山行の詳細が載っており、四月十二日に天城八丁池への登山で、登り三里とある。その行程は辿りたいが、「願れば富士」とあるところから、水生地下バス停付近から登ったのではないかと思う。大悟法利雄氏の記述によると、案内人は湯本館の主人と郵便局の息子で、土地に詳しかったと思われるが、帰途は道に迷ったらしい。

私が八丁池に最初に登ったのは昭和二十一年で、累々と岩石が連なった山道は、変化に富み、途中の難所には棧道が設けられていて、結構な行程だった。牧水のこの登山の頃は、道はさらに険しかったのではないかと推測される。病いがちの牧水には、大変な登山だっただろうと思われる。同時に作られたと思われる残りの六首を記す。

たか山にのぼり仰ぎ見高山のたかき知るとふ言のよろしさ
山川に湧ける霞のたちなづみ敷きたなびけば富士は晴れたり
まがなしき春の霞に富士が嶺の峰なる雪はいよよかがやく
富士が嶺の裾野に立てる低山の愛鷹山は霞みこもらふ愛鷹の裾曲の浜のはるけきに寄る浪しろし天城嶺ゆ見れば
伊豆の国と駿河の国のあひにある入江のま中漕げる舟見ゆ

八丁池の畔で四合壘を一人であけた後、ウイスキーを飲みながらの昼餉の後、峠を越えて相模湾方面をも見て来たのに、八丁池が詠まれていないのは惜しい気がする。
なお、八丁池は火口湖とされていたが、活断層のずれによって窪地となった断層湖と訂正されている。周囲も五六メートル程度で、八丁（約八七〇メートル）はないモリアオガエルの棲息地として有名である。（須永秀生）

わたしの牧水体験

佐伯裕子

若山牧水の著名な歌を知ったのは、中学の国語の時間であった。「幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく」であったか。「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」だったろうか。いずれも感傷的な少女期にふさわしい歌であった。同時に、あまりにセンチメンタルで、何か気恥ずかしかったことも覚えている。

短歌とは気恥ずかしい感情を剥き出しにするものなのだろうか。このように手放して、寂しさや悲しみを訴えていいものか、とも思った。東京オリピックが開催され、アメリカンポップスに湧く昭和三十年代半ばのことである。先生が熱意をこめて朗読する姿を横目に、思春期の少女たちが、どことなく古めかしいと感じたのも無理のないことだったろう。

それから二十余年の後、わたしは、ふたたび若山牧水の歌に出会った。たまたま『世界の詩』(昭和五十四年刊・彌生書房)の七十二卷『若山牧水詩歌集 大悟法利雄編』を手にしたのである。西欧の詩人が多いシリーズで、

短歌は与謝野晶子、北原白秋、石川啄木と牧水の四名が刊行されていた。

引き込まれるように、牧水の歌を読みふけた。それは、「好き」というのとは異なる衝動だった。あてどなく彷徨う人間の悲しさが、どうしようもなく心に沁み入ってきたのである。その時、もつとも印象に残った歌が三首あった。歌の上に鉛筆で記した大きな○印が残っている。

つきつめてなにが悲しいふならず身のめぐりみなわれにふるるな 『白梅集』

つまらなさ手足にあふれふらふらとさまよひあるく身体なりけり 『白梅集』

一時もやすむひまなくわれの身より何かはなれて消えゆくことし 『白梅集』

夫人の若山喜志子との合著『白梅集』の歌である。古くて感傷的と思っていた牧水の歌が、いきなり鮮烈に飛び込んできた三首だった。わたしは、その時初めて『白梅集』の存在を知った。

『白梅集』は、大正六年に抒情詩社から刊行されている。大正五年五月から翌年四月ごろまでの作品が収められており、太田水穂との意見の違いから「潮音」を離れ、「創作」の復活に苦勞した歲月である。また三浦半島から東京に引き上げて、資金繰りに四苦八苦した三十二歳の日々であった。青春は終わったといながら、成熟するにはまだまだ苦しい年齢ではなかっただろうか。

わたしが心惹かれたのは、その居たたまれない「悲しみ」の表し方であった。生きて居て、暮しているという、ただそれだけに潜む理由のない悲しみを、これほど端的に平明に表した歌を知らなかった。「幾山河」の歌や「白鳥は」の歌の伝える、理由のある悲しみとはちがっていた。



『若山牧水詩歌集』



牧水・喜志子 『白梅集』

つきつめて、これが悲しいというのではない。身体の奥から湧き立つような悲哀のゆえに、じっとしてられない身体をもてあましているのである。牧水は、ふらふらと当てどなく歩行する。身体が勝手に動きだしてしまうのである。

一首目の鮮烈な美しさは、「身のめぐりみなわれにふるるな」と叫ぶフレーズにある。屈折を秘めたフレーズだが、難しい言葉ではない。二回目、手足にあふれるのは「つまらなさ」である。その率直な自己観察の新しさ。

三首目の、生きていけばつねに身から離れて消えるものがある、そのように寂しさの本質をふっと気づかせる怖さ。わたしはその時、この三首から牧水の歌の本質を知った気がした。

*

このたび全歌集を読み返しても、かつて感じたように、『白梅集』の果たした役割の大きさが思われた。そうして、次の序文にも注目した。

『過ぎ行く時』、それを静かにみまもつてゐる場合と、時そのもののなかに自身自身をぶち込んで、若しくは巻き込まれて、よれつもつれつしてゆく場合とが私にはある。歌にも自然この二つの場合が出て来る。本集に収めた歌は総じて後者の場合に出来たものが多いやうである。そして、ともすれば絶望的な、自暴自棄的な、とり乱した心のひびきが随所に見えて居ることが自分自身にもよく感ぜられて誠に苦しい心地である。

さらに、いくつかの歌が心に残った。

耳は耳目は目からだがばらばらに離れて虫をきいてをるものか
『白梅集』

だんだんからだちちまり大ぞらの星も窓より降り来ることし
『白梅集』

はつきりとりとらへかねたるわがかけの今日もふらりとこころにうかべり『白梅集』

捉えようとしても捉え得ない、実体のない存在として自己を見つめている。ここにはたわれる身体の把握は、今読んでも新しい。ただくたびれている大酒飲みの寂しい歌ではない。身体と心と身体運動のわけのわからないばらばら感を、ひたすら描写しているのである。その追求の仕方は、伝統的な和歌の抒情ではなく、むしろ分析的であり西欧的だったと思われる。早稲田大学で英文学を専攻した牧水の思考が浮き彫りにされている。

牧水の歌は確かに『白梅集』で変化した、とわたしは思う。平明になりながら、人間存在の物悲しさが端的に表されているのである。『白梅集』をコンパスの芯とすると、それ以前のものとは後の歌は、序文にいう「とり乱した心のひびき」ではないように読める。失恋に乱れた初期の歌でさえ、「過ぎ行くとき」を、冷静に見守って作っているように読めるのだ。

『白梅集』のこれら一連の歌を知ってから、あらためて若い日の恋の歌集『別離』や『路

上』を読んでみると、少女期にただセンチメンタルに感受したものと異なる感想が浮かんでくる。牧水の歌に流れるものは、始めから存在への深い疑いだったのではなかったかと思う。

耳もなく目なく口なく手足無きあやしき
ものとなりはてにけり
『別離』

影のごとくこよひも家を出でにけり戸山
が原の夕雲を見に
『別離』

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼のなき
魚の恋しかりけり
『路上』

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろび
しものはなつかしきかな
『路上』

わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の
棲むよりうらさびしけれ
『路上』

これらの歌を、「旅の歌人」「酒の歌人」「自然の歌人」と呼ばれた牧水の歌の本質に流れるものとすると、ふつと理解が及ぶのである。放浪とも、彷徨とも、漂泊ともちがう、あてどない牧水の歩行を、わたしは人間存在の発見として読むことができる。

一首目、わけのわからぬ「あやしきもの」と成り果てた自己意識の怖さ。二首目の実在

感をもたない存在の不安。三首目の、見ることを拒みたくなる社会との距離感。四首目、「ほろびしもの」を「なつかしきかな」と身に引き寄せて、自己の滅びを匂わせる巧みさ。五首目の新鮮さは、定着できない性向を平明に言い得たところにある。「わが部屋にわれの居ること」の不可思議な居心地悪さを表すのに、託された比喻がおかしくもある。

勝手に手足が動き出すと嘆く歌人、若山牧水に、わたしは何十年もかけて出会ったといつていい。だが同時に、ずぶずぶと沼に沈みこむように、どこにも芯というもののない一連の歌が誘う空無感はどうなのだろう。わけのわからない、寂しい空無感を持って余しつつ、牧水の歌はどのように展開していったのだろう。

遺歌集となった『黒松』に、おもしろい酒の歌がある。重い病により酒を断たれていた牧水の、最後の歩行を読み取ることができ

足音を忍ばせ行けば台所にわが酒の壘は
立ちて待ちをる
『黒松』

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草
をぬくこの庭草を
『黒松』

台所の酒壘までのわずかな歩行、さらには「最後の歌」と記される二首目、居たたまれなく降り立つ庭までの歩行。これらの歌に、わたしは「つまらなさ手足にあふれふらふらとさまよひあるく身体なりけり」を重ねて読んでみた。すると、生きて在ることの居たたまれなさが、身に迫って伝わってくるようになった。

「筆者プロフィール」 さえき ゆうこ



昭和二十二年
東京生れ。学
習院大学文学
部国文学科卒。
昭和五十一年
歌誌「未来」
に入会、近藤
芳美に師事。

平成四年第二歌集『未完の手紙』で第二回河野
愛子賞、同二十六年第七歌集『流れ』で第
四十一回日本歌人クラブ賞をそれぞれ受賞。そ
の他の歌集に『春の旋律』『あした、また』『寂
しい門』『ノスタルジア』『みずうみ』。評論、
エッセイに『影たちの棲む国』『斎藤史の歌』『家
族の時間』『生のうた死のうた』。平成二十七年
三月に開催した第二十六回「雛の歌会」の講師。